慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	松本芳夫著 神代史研究
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.6 (1920. 6) ,p.871(133)- 875(138)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200600-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

め、殊に我國に於ける資本主義の起源及び其の發達に關しては多年研鑽せられた篤學の士である。先づ其の第一編に於いて我國の資本主義的精神を促進せしめし由來を論じ、筆を幕府の崩解に起し、實學の尊重、自由思想、功利主義等の外國思想の影響を明かにし、吾人をして維新當時の所謂文明開化的狀態を彷彿させる。次いで第二編に於いて斯の如き資本家階級の發達に就いて各方面より論及し、最後に現在如何に資本家階級が絶大な勢力を有するかを述べて其の第三編を終結して居る。

著者は我國資本家階級と稱する者は「修養ある士族の產業化並に知識階級の實業化により、全く舊町人とは異なれる新資本家階級」であるとなして居る。（同書三九頁）素よりかゝる階級の發達せし所以は江戸時代に現れたる町人精神の內に資本主義の萠芽を有して居るからであつて、かゝる發達の萠芽を有し且つ資本主義に順應するの能力を有したる當時の智識階級即ち士族の產業化によりて資本主義的產業の發展を見る」に至つたと斷定して、（同書六二頁）こゝに我國資本主義的制度の起源に就いて新解釋を齎さんとされて居る。然る何ほ其の資本主義的勢力の絶大なるは、穩健なる著者をして現代原內閣を目して「平民內閣と云ふも之れ鬼面人を欺くの類にして政權は全く貴族階級より資本家階級へと移り來たるなり。」（同書一二七頁）の言をなさしめて居る。かくて明治維新より現代に至る迄の資本家階級の發達を解剖せる著者は現代の資本家を以つて、武士――士族――官僚を經て完成せるものであるとなし、町人階級は其の支配階級たる機會を失したと結論して居るけれども、（同書一二八頁）是等は少しく外形を重んじて內容を輕視した論法ではあるまいかと思はれる。然し乍ら斯の如き著述の全然欠如して居る今日巧みに材料を取捨し、明確に我國資本家の發達を記述したる點に於て尚も現代社會問題に興味を有する者は一讀の必要があると信ずる。更に本書の後半に附せられてある「町人階級の勃興と町人精神」の一篇は前者を補足し且つ著者の歷史的洞察力を語る有益なる論文である。

最後に著者自らが後日に保留せられたる所であるが、斯の如き學界に寄與する所少からざる研究の完成を一日も早く成就せられんことを希望して敢て妄評の筆を擱く。

（野村兼太郎）

松本芳夫著　神代史研究

神代史は今尙ほ國史研究上の處女地である而して斯くの如き未墾地の開拓に向つて著者の如き眞摯の學風を代表する人を得たことは吾等の第一に感謝しなくてはならぬことである。

而して著者の眼に映じた歷史は未完成なる人類生活實現の記錄であつて、此記錄に對する著者の態度を氏の言を借りて云へば『自己の醜惡を曝露し、現實そのまゝのわれの姿を認めんとすることは實に困難なる、そして非常な誠實と勇氣とを要し、或る場合には悲しくもあるが、しかしあくまで尊い態度である、斯くの如き謙遜なる態度は單に宗教的場合に於いてのみならず、あらゆる場合に於いて尊いのである、國家史研究に際しても、一切の豫謀的意圖を放棄して、國家全般の姿をそのまゝに認めんとする態度に立たねばならぬ、そのまゝとは故意の改竄や隱蔽や曲解をしないこと、即ち一切の政略を廢することである、かくして始めて國家本然の姿が得らるゝのであるが、しかしそれが偉大、弱小、善美、醜惡何れの姿なるかは、吾々の第一

に問ふところではない、吾々の最初に顧慮すべきは、それが本然の姿なるか、即ち何等の政略を交へざる純粋の態度によつて求められたるものなるかの問題である、而してかゝる本然の姿が假令弱小醜悪なるものにしろ、それに面じて毫も動せず、そのまゝにこれを是認する誠實と寛容とを有してこそ始めて誠の大國民といはれ得るのである』（五―六）又た『吾々は自己の現實の姿をそのまゝに認識することが、自己に對する忠實なる態度なりと思惟するが故に國史研究に際しても、あくまでその本然の姿をそのまゝに發見せんとの態度が國家に對する吾々の義務なりと確信する』（七―八）、更に進んで著者が神代史其者に對する研究的態度を見るに、著者はこれが研究に際して多數の歴史家が史料其者に對して何等の批判を施さず、神代史にあらはれた思想觀念を悉く原始日本民族のそれとのみ見做す弊を指摘すると共に、此學の先達たる本居宣長に對しては「彼が限りある人間の智識を以つて、幽玄深奥なる神典を解釋しつくすことの危險なることを警告せるは、彼の古神道に對する宗教的信仰を吐露したもので、彼の立場としては正しいのである、吾々も亦人間の智識を以て一切を理解せんとするの不法なる、そうしてその能はざることを知る然し吾々が古典を神典とみず、これを以て史書となし、あくまで正しき史實の認識を探究せんとするとき彼が如き研究方法は果して信を得たるものであらうか、吾々は斷然その誤れるものなるこそ言明する』、（三五）と論ぜられてゐるのである、「ランケ」の所謂 Nackte Wahrheit は實に著者其人の求めんとする處である。

著者は次ぎに神代史研究に入る順序として、之れが研究上、重要なる意義を有する記錄、殊に古事記に就いて其作成動機を考察してゐるのであるが、著者の見る處によれば古事記編纂に關しては阿禮、安麻呂よりも天武天皇を主とすべきもので殊に帝の政治的閲歴の看過す可からざることを論じて『天智天皇は大化改新の斷行によつて知り得る如く、極めて大膽なる急進主義者であつたに反し、弟帝はむしろ保守主義者であつた、即ち弟帝は當時に於ける日本主義者であつたので、このことは修史事業の企圖とも關係するのみならず修史内容そのものに大作用を及ぼし居らざるなきかを疑ひ得るのである』（五六）と論破せられてゐるのである、而して更に書紀に關しては古事記が主として對内的政策の動機から出たのに加へて、書紀は猶對外的政策の動機をも併せ有するもので、古事記が天武帝の日本主義的精神を重んじ、主として國語を其基調とせるに反して、書紀は唐文明に耽醉した奈良朝文化の影響をうけて純乎たる漢文である從つて書紀が古事記の傳へない多くの異説を有することは事實としても、又、他の一方では單なる字句の潤色や外來思想を以ての紛飾に腐心して多くの假托や虚構を有することも事實であるとなすのである、要するに著者其人の記紀に對する考察は『いづれにせよ、漢字輸入以後に於いて史的記錄の發生したることは事實であつて、聖德太子が修史事業を企圖したるときに、すでに多くの記錄が存在し、これらの記錄を取捨補綴して統一的國家史を構成したるものであることを信ずるのである、而してその修史の動機及び態度に於いて直接外國との接觸によつての刺戟も強大であるは勿論であるが、猶、當時の政治的情勢が極めて大なる影響を及ぼせることは疑ひない、最後に注意すべきは、記紀が純然たる編纂物であり、而もそれが日本紀元千三

百年代、西暦七百年代に於いて概念的な漢字若くは漢文を以つてできたものであるといふことである、奈良朝は隋唐の影響をうけて、實に燦爛たる文化の華を開いた時代であつて、朝鮮支那との交通とともに輸入した多くの外來思想即ち儒道佛教が古來の神道思想以外にむしろ神道思想を包攝して、かの文化の華を織りだしたのであるから、かゝる時代に、しかも外來の文字を以つて編纂された記紀、ことにその神代史が純粹な我國の傳說そのまゝのみでないことは容易に感知せられ得るのである』（七四―七五）との點に存するのである。著者は更に本論に入りて、先づ神話としての神代史に就いて考察せられてゐるのであるが、此點に於て著者と津田氏との見解の異同は著者自からの言を借りて云へば『全體に於ける政治的色彩の濃厚なる故を以つて、直ちに全部を政治的目的の任意なる製作物となすが如きは、神話研究を餘りに蔑如せる獨斷論と云はねばならぬ、なんとなれば神話が神話であるかぎり、それは單に個人的意識の所產ではなくして、言語風習とひとしく民族精神の創造であるからである、吾々が津田氏の說の一部に贊しつゝも、その全部にくみし得ざる所以はこゝにある』（八一―八二）に存するのであるが、著者は此見地に立ちて日本神話の開闢說が單に小數者の或目的の爲めに任意に創作せしものにあらずして、古代日本民族の宇宙開闢觀を表現せしものなることを證し、例者、高天原、黃泉國、常世國はそれぞれ天上、地下、地上の他界觀念であつて神話學上に於ける一般他界觀念の性質と大體一致する事實は明かに日本神話が特殊の少數者の任意的創作でなく寧ろ神話としての起源と性質とを充分に具備するものと認むるのである、更に著者が日本神話に於て指摘せる他の特徵は或意味に於て我邦神話の最初の起源と稱す可き岐美兩神の物語が既に英雄神話の域に到達して、專ら其內容が宗教的政治的社會的要素よりなつて天然的要素の甚だ乏しいことである、著者は之れを以て日本神話が自然的現象の影響をうくること多き原始的域をすでに脫して人の現象を主題とする稍々高度の文化階段に於て構成されたものと認定するのである、勿論、著者が日本神話に於ける自然現象の影響を全然否定するものにあらざることは著者の月讀命對常世國の考察を以て之れを證することが出來るのである、次ぎに「歷史としての神代史」に關する著者の意見は日本神話は現實的國土たる出雲、筑紫、大和の三中心地の物語の連結に他界觀念たる高天原、黃泉國、常世國の物語が混合してなれるものである、これを民族的にみれば主として天孫民族と出雲民族とが二大要素をなすものであると云ふにあるのである、勿論、著者は其間に他民族の神の混入せることは承認するのであつて、現に著者は『文化を異にせる異民族が相互に接觸、鬪爭、同化する場合、單に肉體的混血のみならず、又、精神的文化の混入をも來たさしむるは歷史の證明するところである、それ故日本神話中に多くの異分子の混入せることは言ふまでもない、從つて神話をそのまゝ史實として解釋するは絕對に許すべからざることである』（一七二）と論じてゐるのである。之れを要するに著者の神代史觀は本書の結尾にある『實に神代史の史的價値は神代史そのものゝ本質を明かにすることによつて決定されるのである、而して其研究は自由大膽にして、あくまで眞率であらねばならぬ、歷史が科學にして研究者が學者たる以上すべからく事實の探究を期すべきもの、徒らに外來的勢力に服從するが

歴史の眞の目的では決してないゝむしろ僞らざる本然の國史が構成せられて始めて、眞の國民道德が樹立さるゝであらう』（一九八）が示すが如く、其處には科學的良心の閃きと、研究的精神の旺盛な青年史家の面影を認むると共に、吾等は斯くの如き良心、斯くの如き精神を著者松本君によつて見出したことを三田山上の學院の爲めに心から祝福せざるを得ないのである、妄評多罪

（阿部秀助）